

5/3,AB/4

DIALOG(R) File 351:Derwent WPI
(c) 2007 The Thomson Corporation. All rts. reserv.

0003832797

WPI ACC NO: 1986-287937/

XRAM Acc No: C1986-124659

**Cosmetic material for make-up - prep'd. by blending dehydrated clay
mineral(s) silicone oil and surfactant**

Patent Assignee: SHISEIDO CO LTD (SHIS)

Inventor: SAITO T; TATE K

2 patents, 1 countries

Patent Family

Patent	Application					
Number	Kind	Date	Number	Kind	Date	Update
JP 61210019	A	19860918	JP 198551950	A	19850315	198644 B
JP 1996011722	B2	19960207	JP 198551950	A	19850315	199610 E

Priority Applications (no., kind, date): JP 198551950 A 19850315

Patent Details

Number	Kind	Lan	Pg	Dwg	Filing Notes
JP 61210019	A	JA	4	0	
JP 1996011722	B2	JA	4	0	Based on OPI patent JP 61210019

Alerting Abstract JP A

New cosmetic material for make-up is prep'd. by blending dehydrated clay mineral(s), silicone oil, and surfactant with HLB of 7-18.

Dehydrated clay minerals include kaolin, talc, mica, etc., dehydrated by heating, pref. at 700 deg.C or using vacuum aerator. Their blending proportion is pref. 10-50 wt.%. Silicone oil may be dimethylpolysiloxane, methylphenylpolysiloxane, etc., pref. blended by 4-25 wt.%. Surfactant may be polyoxyethyleneglycerine fatty acid ester, polyoxyethylene alkylesters, etc., blended by 0.5-3 wt.%.

USE/ADVANTAGE - Material has good feeling in use (cool feeling, etc.), make-up retention with passage of time, and stability (e.g., undergoing little damage by perspiration or water). Retention is exerted for both dry- and wet-use cosmetics. In its wet uses, material adequately mixes with water when rubbed with a wet sponge, uniformly adheres to skin, and gives cool feeling.

Basic Derwent Week: *198644*

⑪ 公開特許公報 (A) 昭61-210019

⑤Int.Cl.
A 61 K 7/02識別記号
7306-4C

⑩公開 昭和61年(1986)9月18日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全4頁)

⑪発明の名称 メーキャップ化粧料

⑪特 願 昭60-51950

⑪出 願 昭60(1985)3月15日

⑪発明者 館 和 男 横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑪発明者 斎 藤 力 横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑪出願人 株式会社 資生堂 東京都中央区銀座7丁目5番5号

明細書

1. 発明の名称

メーキャップ化粧料

2. 特許請求の範囲

(1) 脱水した粘土鉱物、シリコーン油及びHLB 7～18の界面活性剤を配合することを特徴とするメーキャップ化粧料。

3. 発明の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本発明は、使用性に優れ、経時の化粧もちに優れ、安定性にも優れたメーキャップ化粧料に関する。

〔従来の技術〕

従来のメーキャップ化粧料は、使用に当って、使用者の好みに応じて、水を含まないパフ、スポンジ、ブラシ等の塗布具により、顔面に塗布する水なし使用のタイプ、とスポンジ、ブラシ等の塗布具に水を含ませて使用する水あり使用のタイプ、とがあった。

水なし使用の化粧料は、仕上げ用メーキャップ

化粧料の主体であり、一般的には、ベースメーキャップ化粧料のべたつきを押さえるために使用されるか、又は単独で使用される場合もある。

(発明が解決しようとする問題点)

しかし、これらは、汗、水等で、化粧くずれを起すことが多かった。又、使用時に清涼感を出し、さわやかな化粧を楽しむ目的で、スポンジ等に水を含ませて最後まで使いきることは、不可能であった。

すなわち、水なし使用のタイプの化粧料は、初めの数回は水を含ませたスポンジ等で使用することは出来るが、何度も繰り返すと、メーキャップ化粧料が凝結して、表面がケーキングを起し、水なし使用及び水あり使用で、スポンジ等に化粧料が付着せず、使用不可能となる。

また、水あり使用のタイプの化粧料は、皮膚に塗布後、水が蒸発することによって汗や水に落ちない化粧膜をつくるようなベースメーキャップ用に組成されたものである。しかし、これは水を含ませたスポンジで使用することが前提であり、化

粧時に水を必要とし、化粧する場所が制限される欠点がある。

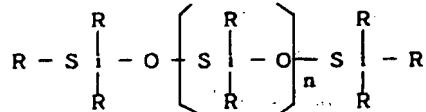
しかも、この化粧料を水を含ませない水なしスポンジで使用すると、初めの数回は、スポンジについて化粧することが出来るが、何回か繰り返すと、化粧料の表面がケーキングを起し、その上から水なしスポンジでこすっても化粧料は付着してこなくなる。

(問題点を解決するための手段)

本発明者らは、こうした事情に鑑み、上記の欠点を解決すべく、鋭意研究を重ねた結果、粉末成分の一成分として脱水した粘土鉱物を用い、油性成分の一成分としてシリコーン油を配合し、さらに特定の界面活性剤を配合することにより、上記問題点が解決することを見い出し、本発明を完成するに至った。

即ち、本発明は、脱水した粘土鉱物、シリコーン油及びHLB 7～18の界面活性剤を配合することを特徴とするメーキャップ化粧料を提供するものである。

本発明に用いられるシリコーン油は、一般式



(式中、nは5～2000の整数、Rは水素原子、低級アルキル基又はフェニル基を示す)で表わされるもので、就中Rが全てメチル基のシリコーン油が好ましい。

シリコーン油の例としては、ジメチルポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン、ジフェニルポリシロキサン、メチルハイドロジェンポリシロキサン等を挙げることができる。

配合量は、2～40重量%が好ましい。さらに好ましくは、4～25重量%である。

なお、分子量の小さいシリコーン油は、使用感で、のびが軽く、さうばかりさが得られる一方、分子量の大きいものは、のびが重く、フィット感、密着感が得られるという特徴をもつ。

なお、油分としては、本発明のシリコーン油の他に、化粧料に通常使用されているオイル、ワッ

以下、本発明の構成について詳述する。

本発明に用いられる脱水した粘土鉱物は、例えばカオリン、タルク、雲母、モンモリロナイト等の粘土鉱物を加熱あるいは、真空脱気等により脱水したものである。これらの方によって、結晶水が脱水された粘土鉱物が得られる。加熱により脱水する場合には、700℃以上の温度で2時間以上焼成することが好ましい。脱水の時期は原鉱石の段階で脱水処理した後、粉碎しても良いし、粉碎した後に脱水処理しても良い。

このようにして、脱水処理した粘土鉱物の1種又は2種以上が任意に選択され使用される。配合量は、2～70重量%が好ましい。さらに好ましくは、10～50重量%である。

なお、脱水処理した粉末の他に化粧料粉末として通常メーキャップ化粧料に使用される粉末は全て使用でき、例えばタルク、カオリン、炭酸マグネシウム、雲母、セリサイト、ナイロン末、ポリエチレン末、二酸化チタン、酸化亜鉛、酸化鉄、有機顔料等が配合できる。

クス類の油分例えば、スクワラン、流動パラフィン、ワセリン、ポリイソブチレン、マイクロクリスタリンワックス等の炭化水素、カルナウバロウ、ゲイロウ、ミツロウ等のロウ類、オリーブ油、ヒマシ油、ヤシ油脂肪酸トリグリセライド等のトリグリセライド、イソプロピルミリステート等のエステル油、セタノール、ステアリルアルコール等の高級アルコール、オレイン酸、ステアリン酸等の高級脂肪酸、環状シリコーン等の本発明のシリコーン油以外のシリコーン等が配合できる。

本発明に用いられるHLB 7～18の界面活性剤は、HLB 7～18の界面活性剤を単独に用いることはもちろんあり、又親水性界面活性剤同志の2種以上、又は親水性界面活性剤と親油性界面活性剤との2種以上の混合物の形で用いることもできる。

界面活性剤の例としては、ポリオキシエチレンソルビタン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレンソルビット脂肪酸エステル、ポリオキシエチレングリセリン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレン

グリコール脂肪酸エステル、ポリオキシエチレンアルキルエーテル類、ポリオキシエチレンフィトステロール類、ポリオキシエチレンポリオキシプロピレンアルキルエーテル類、ポリオキシエチレンアルキルフェニルエーテル類、ポリオキシエチレンヒマシ油、硬化ヒマシ油誘導体類、ポリオキシエチレンラノリン誘導体、ポリオキシエチレンアルキルアミン、脂肪酸アミド類、シュガーエステル類、グリセリン又はポリグリセリン脂肪酸エステル類等が挙げられる。

配合量は、0.1~6重量%が好ましい。さらに好ましくは、0.5~3重量%である。

本発明の化粧料は、上記の必須成分に加えて、必要に応じて、保湿剤、顔料、香料、防腐剤等が適量配合することができる。

(発明の効果)

以上の如くして得られた本発明のメーキャップ化粧料は、清涼感に優れる等の使用感を持ち、汗、水等で化粧くずれすることのない優れたものである。又、水なし使用のタイプの化粧料を製造して

も又、水あり使用のタイプの化粧料を製造してもいずれも使用してのさらに、経時の安定性に優れたものである。さらに、水ありで使用する場合、スポンジ等で化粧料の表面をこすることにより、化粧料をスポンジの水が適度に混ざり合い、顔面に塗布した時、均一に肌につき、尚かつ、清涼感があり、充分な化粧効果を与えるものである。また水なし使用の場合でも充分な化粧効果が得られる。

(実施例)

次に実施例によって、本発明をさらに詳細に説明する。配合量は、重量%である。

(以下余白)

実施例1、2 固型状ファンデーション

	実施例		比較例		
	1	2	1	2	3
焼成タルク	40	35	—	35	35
タルク	—	—	35	—	—
マイカ	30	20	20	20	20
ナイロン末	5	5	5	5	5
酸化鉄(赤、黄、黒)	5	5	5	5	5
流動パラフィン	8.5	7	7	8	27
ワセリン	5	5	5	5	5
ソルビタンセスキオレート	2	2	2	2	2
POE硬化ヒマシ油(HLB=16.5)	0.5	1	1	—	1
メチルポリシロキサン 粘度20CS(25℃) n=5~10	—	20	20	20	—
メチルポリシロキサン 粘度5000CS(25℃) n=608	6	—	—	—	—
香 料	適量	適量	適量	適量	適量
防腐剤	適量	適量	適量	適量	適量

(製法)

粉末部をブレンダーで攪拌混合し、予め加熱溶解した防腐剤を含む油分部(80~90℃)と香料を

吹きつけ、更に攪拌する。その後、粉碎して成型機で圧縮成型し、固型状ファンデーションを得る。実施例(1、2)、比較例(1~3)について、50名のパネルに使用してもらい次の如くなつた。

評価項目	実施例		比較例			
	1	2	3	3		
スポンジへの取れ のび	+2	+2	+1	+2	+1	+2
肌へのつき	0	+1	+1	+2	0	+1
粉っぽさ	0	+1	+1	+1	0	+1
さっぱりさ	+2	+2	+2	+2	-1	-1
べたつき	+2	+2	+2	+2	-1	-1
しっとりさ	+1	+1	+2	+2	+1	+1
密着感	+2	+2	+1	+1	+1	+1
仕上り感	+1	+1	+1	+2	0	0
総合評価	+1	+2	+1	+2	-1	-1

(-2:悪い -1:やや悪い 0:普通 +1:やや良い +2:良い)

又、比較例1は、水なし使用でパクト表面がケ

ーキングを起こし、比較例2は、水あり使用でスポンジ等へ付着しにくくなり、顔面に殆んど塗布できなかった。これに対して、実施例1、2は安定性の良いものであった。

(以下余白)

実施例3、頬紅

焼成カオリン	20.0
タルク	41.5
パール顔料	20.0
赤色226号	1.0
酸化チタン	2.0
黄色酸化鉄	0.5
スクワラン	5.9
デンブンパルミチン酸エステル	1.0
メチルポリシロキサン 粘度200CS(25℃) $n = 150$	4.0
メチルフェニルポリシロキサン 粘度10~20CS(25℃) $n = 4$	1.0
ラノリン	2.0
ソルビタンセスキオレエート	1.0
POEソルビタンモノオレエート	0.1
香料	適量
防腐剤	適量

上記处方で実施例1と同様に調製して、ケーキングしないで、さっぱりした水あり使用、水なし使用、の2通りで使用できる等、安定性、使用性の優れた頬紅が得られる。

実施例4、アイシャドー

パール顔料	20.0
焼成マイカ	20.0
タルク	15.0
セリサイト	10.0
群青	1.0
弁柄	3.0
酸化鉄黒	1.0
メチルポリシロキサン 粘度200CS(25℃) $n = 150$	10.0
メチル水素ポリシロキサン 粘度15~25CS $n = 40$	2.0
ラノリン	5.0
流動バラフィン	10.0
マイクロクリスクリンワックス	2.0
POEステアリルエーテル (HLB=8)	1.0

上記处方で実施例1と同様に調製してケーキングしないで水あり使用、水なし使用、の2通りに使用できる等、安定性、使用性の優れたアイシャドーが得られる。